

土佐のわらべ

第432号《第454回（2017.12.14） 子どもの本の読書会記録》参加者8人・文書参加3人

『町かどのジム』

エリノア・ファージョン/文 エドワード・アーディゾーニ/絵 松岡 享子/訳 童話館出版

現図書館での最後の読書会です。原点に戻って、そして次につなげていきたいね！という思いから「子どもの本の読書会」第1回（1979年1月）の課題本「町かどのジム（日本での初版1965年、学習研究社／出版・松岡享子／訳・三芳悌吉／挿絵）」を採り上げました。今回は新しい版です。

物語は「町かどのポストのそばに、ミカンばこがひとつおいてありました。そこに、ジムがすわっていました。」という文章で始まります。通りに住んでいる人はみんなジムの面倒を見、子どもたちは、ジムを心から愛していました。特に8歳のデリーは、ジムが船乗りだったころの話を聞くのが大好きでした。

ジムが語るお話はどれも奇想天外。ほらふき男爵やドリトル先生を思い浮かべた方、ガリバー旅行記を子ども向きに書くところなるのかなとか、アンデルセンの絵のない絵本を思い出した方もおられ、皆さん想像が広がったようです。「しゃれが効いて言葉の面白さも子どもに伝わると思う」「英語を知っているともっとユーモアが楽しめる」「老人と子どもの心のふれあいや感情の共有に、会話が大切だと思った。感情を表に出せない子どもが増えている今、こういう物語を子どもたちに読み聞かせしたい」。という感想が聞かれました。「ジムの身の上を思うとなんだか寂しくて、物語の楽しさがそれを上回らない」「今の時代にそぐわず、ジムのような人との関りは、今の子どもにはわからないよね」という声も。

この作品が発表されたのが1934年。イギリスの当時の生活文化が、作品の持つ空気感からよく伝わってきます。日本で今まで読み継がれてきたのは、子どもへの温かな視線を持つ訳者の力も大きいのでしょうか。

作品に魅力を添えているのがアーディゾーニの挿絵。彼の絵が好きだという方は「ちょっと影があって淋しげな線の陰影に感情を揺すぶられる。さり気なく風景を写しとっており、人もはっきりとした形ではなく雰囲気を描いている。ファージョンの作品世界をよく伝えていると思う」と熱く語ってくれました。

「80歳の誕生日には海が見たい」というジムの願いをデリーが叶えてくれます。子どもの本のラストはこうでなくちゃね！優しく温かい気持ちで最後の課題本を閉じることができました。

最近、なんだか不安な気持ちでざわざわしてしまいがちですが、こんな時だからこそ、子どもたちに優れた本に出会ってほしいと願います。

読書会は今回で一区切りです。たくさんの本との出会い、人との出会いは私の宝物です。県立図書館に「子どもの本の読書会」という居場所があり続けてくれたことに感謝の気持ちでいっぱいです！！

歴代の事務局の司書の皆さん、そして「子どもの本の読書会」に集ってくださった皆さん、楽しく充実した本との時間をありがとうございました。

新図書館で再会しましょうね (^_^)~

(C.O)